
車輪の跡、ありがとうが言いたくて

コノエイクノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

車輪の跡、ありがとうが言いたくて

【Nコード】

N6185E

【作者名】

コノエイクノ

【あらすじ】

雪が降る寒い早朝。積もった雪を潰しながら、町の最後を、彼女の最後を受け入れに行く。少しだけ冷たくて、少しだけ暖かい物語。
(多分……)

(前書き)

文中にBUMP OF CHICKENのスノースマイルの歌詞を
少し使わせて頂きました。BUMP OF CHICKENのファ
ンの方は回れ右っ!です

神様がいないのなんて、分かっている。神様が願いを叶えてくれな
いのだって、神様が理不尽なのだって、何もかも分かっている。それ
でも、俺は願ってしまう。

彼女に、楽と自由と、生きる時間をあげて下さい。

「痛く、ないか？」

まだ踏みつけた跡のない、綺麗な雪の道。田舎町に降った雪は、
去年に比べると少なくて、気温も少し暖かい。これが本当に冬なの
か、少し疑問に思う。

そんな綺麗な雪に、一つの車輪の跡と、一つの足跡を深く付けて
いく。一つの車輪の跡は車椅子。都会にある大きな大学病院の名前
が書かれたダサイダサイ古びた車椅子。それには小さな女の子がち
よこんと座り、見上げて俺に微笑んでいた。雪の様に白い髪、幼さ
の残る顔、細く白い手足。首に巻いた黒のマフラーが場違いな気が
するほど、彼女は白かった。

「雪、綺麗だな」

彼女は言葉を発しない。ただ微笑むだけ。それが、彼女の限界だ
から。俺を見上げてるのだって、きつと、きつと辛いはずなのに。

「あれ、俺が通ってる高校なんだ。周りになんもないから不便だ

けど、いい学校だよ」

遠くに見えるポツンと建つ建物。この田舎町に唯一ある高校だ。倍率が毎年低くて、生徒数は少なく、普通科と福祉科があるだけの小さな高校。彼女も、何もなかったら一緒に通っていたのか、なんて考えてしまう。虚しいだけの空想。だって、だって彼女は――

もうすぐ、いなくなってしまうのだから。もうすぐ、死んじゃうんだ。

彼女は、治る事のない病気を患っている。それはもう小さい時からで、今に始まった事じゃない。身体が、動かないのだ。俺も医者から説明を受けた。病名不明の、治療法なしの病気。それは、足がまず痛くて動かせなくなるらしい。次に腕、次に首。最終的には、口を開くことも、目を開けることもできなくなり、生きている事が苦痛になる位の痛みが身体を襲う。最後には、家族が見ていられなくなり、薬を投与して終わりにしてしまうんだそうだ。

そんな彼女がこうして外に出られたのは、最後に外の景色を見せるため。彼女の終わりが、見えたから。

「小学校の頃よく行った駄菓子屋さ？もう潰れちゃったんだ。そりゃそうだよな。あれだけオマケしてくれたら潰れるよな」

学校から歩いて二十分位の場所に駄菓子屋があった。古びた駄菓子屋で、そこにはにこやかに笑うお婆ちゃんが居た。その人は駄菓子を買う度に、買った以上の値段分のオマケを袋に入れてくれた。消費税もかからなくて、よく行ったものだ。

なんだってそうだ。あの日あった物は、今にはない。いつかは色

褪せてしまって、そして思い出せなくなる。じゃあ、彼女の事も？
いつかは色褪せて、あの日聞いた声も、微笑む顔も、この姿も、俺
は忘れてしまおうだろうか？

気が付けば、町の終わりに来ていた。桜の木が何本も植えられた
並木道。今は枝が寂しく揺れるだけの並木道。この並木道を行けば
隣町に出られる、この町の終わり。

「……帰らなきゃな」

許された時間は少なく、ゆっくりしている暇はなかった。引き返
そうと車椅子を来た方向に向けるが、押すことが出来なかった。一
つの車輪の跡と、一つの足跡が続く道。終わってしまう。終わっち
やうんだ……。

頬を一つの涙が流れる。それは連なって瞳から流れて、車椅子に
座る彼女へと落ちる。不安げに見上げる彼女を後目に、俺は泣いた。
足元から崩れて、真新しい雪を涙で溶かしていく。

「……っ……うっ……ううっ……」

嗚咽を我慢して、泣く。泣いても何も解決しないのは分かっている
さ。でも、止まらないんだ。

泣きじゃくる俺の肩。何かがポンッと軽く置かれる。見上げると、
彼女がにっこりと笑って立っていた。車椅子から立ち上がった。いた。
激痛で立ち上がれない筈の彼女が。

「……お……お前……」

「……さいご……に……」

俺の言葉を遮るようにして、何年も聞いていなかった彼女の声が耳に届く。

「……いいた……かった……」

たどたどしく紡ぎ出される言葉。彼女は俺と同じように膝を付き、包み込むようにして俺を抱きしめた。驚く俺の顔を見て、笑いながら言った。

「……ありが……とう……」

その言葉を待っていたかのように、彼女の身体は力を失って倒れ込んだ。ドサツと生々しい音が耳に入る。

「お、おい!!!!!!」

急いで抱きかかえた彼女の身体には温もりがなく、息も、なかった。

季節は同じ。春がやって来て、夏がやって来て、秋が来て冬が来る。ずっと変わらない。

彼女がいなくなって二度目の冬。彼女の主治医から手紙が送られてきた。大きな大学病院の封筒の中には、彼女の病室にあった本が数冊と花柄の便箋。宛先の欄には俺の名前、裏には彼女の名前があった。その横には日付があり、五年前のちょうど今日になっていた。

便箋を丁寧に破り、中身を取り出す。一枚の紙が入っていた。柄もなにもない、ただ線が引いてあるだけの紙には、丸い文字が書かれていた。書き出しは、『アナタへ』。

『アナタへ。』

元気でしょうか？私は今のところ元気です。

お医者さんから、もしかしたら指が動かなくなると言われたので、今のうちに手紙を書きます。

アナタは意地悪で、すぐ楽を考える人で頼りないですが、私はそんなアナタが好きです。

多分、私は死んでしまっているでしょう。この手紙は、私が死んで二年後にアナタに届けてほしいとお医者さんに頼んだものです。

言いたい事が沢山あります。でも、あんまり長くするとアナタの事だから読みそうもないので手短に。

今まで迷惑を掛けてごめんなさい。アナタも一緒に苦しめてしま
ってごめんなさい。

今まで家族以上に優しくしてくれてありがとう。感謝しています。

そして、愛してくれてありがとう。

好きだって言ってくれてありがとう。

微笑んでくれてありがとう。

私も、アナタが大好きでした。大好き。

……さようなら。大好きな一真^{かずま}。

平成××年12月16日

三姫華夜^{みひめ・かよ}より。大好きな井草一真^{いぐさ・かずま}へ。』

大好きなんて彼女の口からは一度も聞いた事なんてなかった。そ
れが手紙でも嬉しくて、少しこそばくて。

「大好き……か」

泣きそうになり、上を向く。空は白く、朝降っていた雪が今にも
また振り出しそうだ。

あの日彼女の車椅子を押して歩いた道。今振り返ってもあの車輪

の跡はないけれど、それが自然と悲しくはなかった。

車輪の跡がなくなっちゃって、足跡が一つだからって、俺は泣かない。

俺は歩くよ。

自然と君が、横に居るような気がするから。

君と出会えて、よかった。

気が付くと、空からは粉雪がちらついているのだった。

END

(後書き)

……今回も登場しましたあ。駄文マスターですっ!!

さて、今回は真夏を無視しての冬のお話。その時点で空気の読めない奴ですけど……。いい加減設定が似たり寄ったりになってきたような……。読者様に飽きられない事を祈ります(笑)

感想や評価お待ちしております。

では、

また。

コノエイクノ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6185e/>

車輪の跡、ありがとうが言いたくて

2010年10月11日03時10分発行